

木質ペレット ボイラーに転換

下呂市の第三セクター、南飛騨馬瀬川温泉「美輝の里」は、加熱用ボイラーの燃料を、従来の灯油から、木くずを固形にした木質ペレット主体に転換する。市内で生産されるペレット燃料を使い、十月から稼働する見通し。二酸化炭素(CO₂)の排出削減と地域内でのエネルギー循環の実現を目指す。(福本雅則)

下呂の温泉施設「美輝の里」10月から



温泉施設は、旧馬瀬村営で一九九六年四月にオープン。敷地内にある源泉の温度が三二・九度と低く、灯油のボイラーで加温している。灯油の年間消費量は二十六万六千リットル。環境問題への関心の高まりと昨年の原油高騰を機に、ペレットボイラーの導入を決めた。総事業費は約四千四百四十万円。

市内で燃料生産、CO₂削減へ

従来のボイラーも温度調整に残すが、灯油の使用量は三分の一以下に減る。年間で約七百トンのCO₂が削減できる計算という。

この取り組みは、市内の南ひだウッド協同組合と連携して進める。同組合は製材工場出る木くずなどからペレット燃料を作る施設を整備(費用約八千万円)。年間約五百八十トンを生産し、美輝の里に供給するほか、家庭向けペレットストーブ用も作る計画だ。

美輝の里、南ひだウッド協同組合とも木質バイオマス利用を推進する。国と県、市の制度を活用。それぞれ六割が助成される。

美輝の里の加藤久人総支配人(左)は「地域にペレット活用を広げるためにも、いい成功例をつくりたい」と話している。